

訳者序文  
ーワークショップ参加記ー

寺戸 宏嗣\*

キャスパー・ブルーノ・イエンスン氏との懇談セッションには、氏を含めて6人の参加者を得た。

はじめに氏より、編著『ドゥルージアン・インターセクションズ』に至るまでの自己紹介的な話題提供がなされた後、他の参加者から氏への質疑応答がなされた。話題提供の内容については、後日イエンスン氏が改めてエッセイにして寄稿してくれた。本稿ではそれを訳出するが、まず、そこに含まれていない氏の背景について当日の話より簡単に紹介したい。

母国デンマークでの大学院生時代、イエンスン氏は情報メディア論を専攻していた<sup>1</sup>。コンピュータ科学者もいれば技術史家に哲学者もいるという学際的環境の中で、とりわけブルーノ・ラトゥールの思考に触発されたと振り返る。それも、科学技術の独特な記述法というよりも、その哲学的な概念構築や世界との関与のあり方に触発されたようだ。科学技術社会論の視点と手法を踏まえて、デンマークの医療情報学の展開と電子カルテ技術の役割を調査したイエンスン氏だが、そうしたケーススタディを記述するばかりでなく、そこから「何を学べるか、そしてこれまでとは違う形で何を行えるか (What can we learn, and do differently)」が大切だと言う。その後のドゥルーズや人類学への接近については後掲エッセイのとおりだが、そこでの狙いは学問分野の枠にとらわれずに概念の再考を促すことにあるのだそうだ。

このように氏は、理論と実践、概念と経験、また人間と非人間を存在論的に同等のもの（それは「フラットな存在論」というより「フラクタルな存在論」だと言う）として、それらの関わり合いを記述することに哲学的かつ「実践的」な可能性を求める。そして氏にとって、こうした追求は人類学的なのである。

さて、懇談セッションでは前日の氏の発表をふまえつつ、このような「創造的記述」をめぐって質疑応答がなされた。「随行的科学としての人類学：絶えざる変奏のなかにある人間性と社会性」と題された前日の発表で氏は、アンマリー・モル流の「経験哲学 (empirical philosophy)」とマリリン・ストラザーンやエドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロ流の「多自然主義人類学 (multinatural anthropology)」との創造的対話（少なくとも、そのための暫定的対峙）を、いくつかの軸を立てて思考実験した。そのなかでエティック

---

\* 東京大学大学院総合文化研究科博士課程

<sup>1</sup> 氏の詳しい経歴については <http://www.itu.dk/people/cbje/>を参照。

／イーミック、または対象世界の外部／内部という軸を暫定的に立てたうえで、その境界線を揺るがず記述のあり方がひとつの論点となっていた。人間と非人間の対称的記述というのも、この「創造的記述」の戦略に関わる場所である。

質疑応答では、こうした対称的で境界横断的な記述と言っても、エティック／イーミックであれ、理論／実践であれ、人間／非人間であれ、それらの軸の取り方に一定の前提が入り込むのではないかという問いが焦点になっていたと思われる。たとえば、経験的なものと概念的なものどちらの側に記述は位置するのかという質問。あるいは、人間と非人間を対称的に記述するということがある種の前提となってしまうことに問題はないのかという質問。また、インフォーマントが独自の「エティック／イーミック」なり「理論／実践」の認識を持っているときどうするのかという質問。

いずれも答えにくい質問が並ぶなか、イェンセン氏は積極的に応答してくれた。その内容については後掲エッセイにはほぼ含まれているが、ふたつだけ紹介したい。

氏は、目指す創造的記述のあり方として「フラットな存在論 (flat ontology)」ではなく「フラクタルな存在論 (fractal ontology)」に言及した。この違いに対する質問に、それは、人間と非人間を対称的に記述するアクターネットワーク論では権力やジェンダーやヒエラルキーを背景にした現実の不均衡を語れないとの批判を踏まえたものであると言う。「フラクタルな存在論」が具体的にどのような創造的記述をもたらすのかは示されなかったが、それは（氏にとってだけでなく）現在進行中の課題ということだろう。

もうひとつは、学問分野にとらわれずに概念を再考した先の独特な記述は、他の分野の研究者や実践家たちとの創造的対話をどのように開くのかという質問である。イェンセン氏は、たとえば私たちの考え方が経済学者にとって「奇妙 (strange)」であるように、経済学者の考え方は私たちにとって「奇妙」であり、そこには「翻訳 (translation)」が必要となると言う。現在、氏は開発援助分野でのアカウンタビリティに注目する研究プロジェクトを進めており、そこでたとえばオーディターの実践する「翻訳」を観察するとともに、自らも彼らとの対話において「翻訳」を試みているようだ。

このように、イェンセン氏との対話では参加者が抱えている原理的な問いをぶつけ、氏はそれに一定の解答を提示するのではなく難題を共有する姿勢で臨んでくれたように思う。参加者のほうも、それぞれの疑問や議論を氏にだけでなく参加者全員に投げかけていた。報告者としてはやや議論が抽象的すぎた印象を持っているものの、それは「若手」どうしで問題共有、意見交換をうながそうと意識していたゆえだった面もあるだろう。実際セッション後の打ち上げや、さらにその後のメール上でもやり取りが継続でき、それぞれに貴重な刺激を得られたに違いないと思う。そこから氏をも巻き込みつつ対話をさらに発展させられるか、私たちの課題である。

それでは、以下にイェンセン氏の寄稿してくれたエッセイを訳出する。